文化財ノート No.34

平尾台原遺跡（ひらおだいはらいせき）

稲城市教育委員会
社会教育課
稲城市東長沼2111
☎042－378－2111
発行　1999.10.20

平尾台原遺跡出土の縄文土器と弥生土器

平尾台原遺跡は、平尾住宅の北側の一段低い台地に広がる遺跡で、縄文時代から古墳時代にかけての大変長期間にわたって営まれた複合遺跡です。また稲城市でも稀な弥生時代の集落遺跡としても知られています。発掘調査は、平尾地区の土地区画整理事業に伴って、昭和52年から53年にかけて3回実施されました。しかし、遺跡全体を対象とした調査ではなく、区画整理事業の道路部分を中心として、約4,400㎡の面積を発掘調査しました。調査によって、縄文時代から古墳時代にかけての各時代の遺構・遺物が発見されました。その概要は次のようなものです。

平尾台原遺跡の位置

縄文時代早期～後期（約7,000年前～約3,500年前）

縄文時代の遺物は早期から後期にかけての土器・石器が発見されています。それに伴う遺構は前期から後期にかけてで、住居跡は前期前半1軒、中期末から後期初頭6軒、後期前半2軒の計9軒が発見されました。特に中期末から後期にかけての時期に集中しており、この時期に集落が形成されていたことがわかります。出土した土器や石器も大量で、おそらく未発掘部分と合わせると相当規模の大きな縄文集落があったことが考えられます。この集落は遺跡全体から見ると、西側

に集まっていました。また、発見された住居跡には、柄鏡形の竪穴住居が３軒含まれており、縄文中期の終末期につくられたことがわかりました。同期の貯蔵用の袋状土壙からは大量の土器・石器類が出土し、ゴミ穴として転用されたことが判りました。

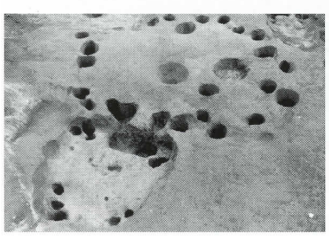
弥生時代中期～古墳時代初頭（約2,000年前～約1,700年前）

当初の予想に反して、弥生時代の遺構・遺物が発見されました。弥生時代から古墳時代初頭の時期の住居跡は、弥生時代中期2軒、後期2軒、終末期6軒、古墳時代初頭12軒の計22軒です。また弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓が5基発見されています。弥生時代中期後半と後期末から古墳時代初頭の時期の2度にわたって集落が営まれたことになり、特に2度目の集落である後期末から古墳時代初頭の時期には、方形周溝墓という大型の墓がつくられ、居住域と墓域を区別した大規模な集落であった事が判りました。このような方形周溝墓を含む弥生時代の集落は、周辺の多摩丘陵でも珍しく貴重な遺跡です。

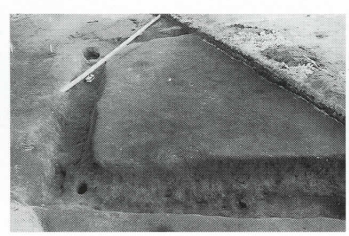
古墳時代後期（約1,400年前～約1,350年前）

古墳時代初頭以降約300年の空白期をおいて、ふたたび集落がつくられます。古墳時代も終わりに近い7世紀前半から中頃の時期で、3軒の竪穴住居跡が発見されています。この時期の住居は北側にカマドをもつ正方形に近い竪穴住居で、住居内からは大量の長甕や坏などの土器（土師器）が出土しました。この時期はちょうど大化の改新（645年）の頃であり、律令国家の建設がはじまり、次第に地方の村々も中央の支配体制のなかに組み込まれていく時代です。

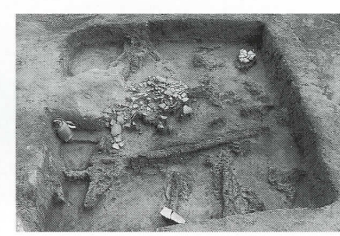
引用参考文献.『稲城市平尾台原遺跡』『稲城市史上巻』



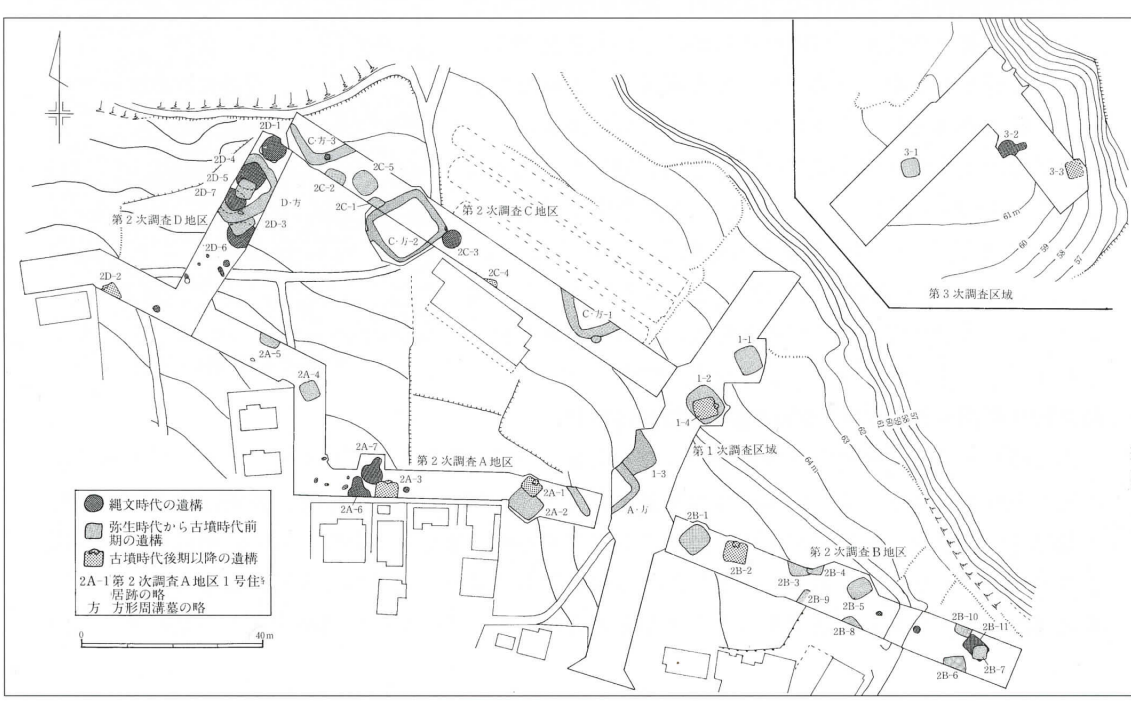
縄文中期の竪穴住居跡



方形周溝墓



古墳時代の竪穴住居跡



平尾台原遺跡の遺構平面図